都市の春

南風にゆれる薄紅の花びらを愛(め)で

この都市は人間たちの安堵感を体温とする
ああ、美しい桜、満開の桜
それ以上でも、それ以下でもない、まさに頂点
その差し伸ばされた腕の下をくぐる
あらゆる音が周囲から消え失せる
この都市の全てが、既に僕には無意味となっている

もやもやとした春の大気は、かすかに血の匂いがする
意味を荒捜ししようとする、苛立ちに満ちた血の匂いがする
自らの創造物に取り巻かれ、偏執狂と化した者の叫びが歯軋りする
都市そのものに締め上げられ、呻き喘ぎ、捻じ曲げられた叫びが！

この桜道(さくらみち)を行く人々の郷愁は、何処へ向けられるのだろう

譲り渡した五感
閉じ込められた肉体
眺望を失った精神
この世界は現在の人間にとって、物理的かつ概念的に狭すぎる・・・

無数に差上げられた内蔵カメラが食るもの
それは我々の空腹を満たしはしても
記憶として生き続けることはない
あまりに惨めに消え失せる「時間」
いや、それともこれは自然が仕組んだ壮大な実験なのかもしれない

おお、我々の創造物であるクローンの桜よ
お前たちはいつか進化の後、種子を実らせるがいい
そして我々の滅亡の後に伝えるのだ
この都市民族たちの春爛漫の息吹を

(2004.3.30)